

文教大学文学部外国語学科で取り組む 課題解決型学習（PBL）とグローバル人材育成

糸井 江美・武田 和恵

Considering Project Based Learning and Global Citizenry Cultivation at Bunkyo University's Department of Foreign Languages

Emi Itoi, Kazue Takeda

This paper overviews various PBL (project-based learning) programs developed and conducted in Japanese universities that play leading roles in practicing student-centered approaches. We discuss what can be incorporated into the new curriculum of the Department of Foreign Languages at Bunkyo University in order to encourage students to get involved in activities and interactions with other people with different cultural/social backgrounds in this period of rapid globalization.

キーワード：project-based learning（課題解決型学習） 多文化共生
グローバル人材育成

1. はじめに

2017年度より新設される文教大学文学部外国語学科（以下外国語学科）では、その教育理念の主軸に地域に根ざしたグローバル人材の育成を掲げており、カリキュラムには教師が一方的に講義をする従来型の授

業形態とは違い、学生が主体となって学ぶアクティブラーニングを積極的に取り入れるという方針が示されている。本報告書では、アクティブラーニングの中のproject-based learning（以下PBL）を取り上げ、PBLを先駆的にカリキュラムに導入し一定の成果を生んでいる他大学の報告を紹介すると同時に、外国語学科がグローバル人材育成のためにどのようにPBL科目を実践し、将来的に学科を超えた新しい学びの形態として発展させるにはどうすればいいのかを論じる。

2. PBLとは

現在の高度情報化社会では、学生が学ばなくてはならない新しい知識や技術が飛躍的に増えているが、大学での授業時間がそれに比例して増えることはない。そこで大量の断片的知識を体系的に詰め込んでいく代わりに学生自らが解決、改善を必要とする社会の問題点を見つけ出し、その問題を解決するために知識を総合的、統合的に習得することが必要となった。そこで生まれたのがPBLと呼ばれる課題解決型の学習形態である。PBLでは多くの場合、個人ではなくチームで活動し、学習者は他者と協働し、教室外での体験的な学びを通して、問題を解決していき、最後には成果や結果を発表し学びを共有することになる（Markham, 2011）。また結果を発表する行為によってプレゼンテーション能力も身につけられる。

既に国内外の教育機関から実践報告書や実証研究報告も発表されており（例えばBeckette, 2005; Bell, 2010; Grant, 2011; Helle, Tynjala & Olkinuora 2006; 森村・鈴木, 2012）、単なるアクティビティー中心の授業との違いは容易に知ることができるが、現場の教員の中には学期の最後に生徒や学生に発表などをさせることでPBLを実践していると誤解している教員がいることも指摘されている（Markham, 2011）。今後はさ

らに実践報告や実証研究の発表が増えて、PBLの理解が深まるとともに実践の質も向上することが期待される。

3. 先駆的な大学での取り組み

日本国内でもすでに多くの大学でPBLが導入されており、大学のホームページには主に受験生に向けたメッセージとしてPBLの説明やその授業内容の紹介が載っている。以下にいくつかの大学のホームページに掲載されているPBL科目を紹介する。

多摩美術大学ではPBL科目は全学科、全学年の学生が横断的に履修できる授業となっている。20数年に及ぶ産学官共同研究に基づいており、地域社会と連携した実験的、実践的な内容である。PBL科目での学びの成果は展示や発表会などで公開している。例えば、環境デザイン学科PBLの「まちなか賑わいプロジェクト」では八王子商店街の店舗の課題を学生たちは店主と一緒に分析し、その課題を解決するための方法や施策も共同で検討し、最終的には八王子市生涯学習センターで成果が発表されている。多摩美術大学のホームページには受験生向けの情報として、PBL科目の目的や魅力が高校生にも分かりやすい文言で紹介されている。

九州工業大学は、2008年に工学部の改組を行い3つの新学科を設立した。その中の総合システム工学科は学際融合型の先端技術に対応できる人材育成を目指しており、モデルケースとして工学部の教育改革の先陣を切っている。九州工業大学のこの教育改革の取り組みは文部科学省が認定する2008年度の「質の高い大学教育推進プログラム」（教育GP）に採択されており、単なるカリキュラムの開発・整備に留まらず、教育環境・学習環境のトータルなデザインや、PBL教育の運営・管理体制などを整備し、工学部全体として工学教育の全国スタンダード化を目指している。

工学系の大学では芝浦工業大学のグローバル力養成への取り組みが外国語学科の目指す教育にとって参考になる。芝浦工業大学は文部科学省が2014年に公募したスーパーグローバル大学の一つに採択された。このスーパーグローバル大学には世界のトップレベルを狙う実力があるトップ型の大学が13校、そして新しいことに挑戦しうる実力と実績のあるグローバル化牽引型と呼ばれる大学が24校選ばれた。芝浦工業大学は後者に含まれる。

芝浦工業大学の「グローバル力養成ツール」と呼ばれる内容は多岐に渡っており、「毎日学べる英会話」や神奈川県葉山町にあるセミナーハウスでの英語研修、E-Learning、海外語学研修、TOEICテスト、PBL科目などが用意されている。ここでは特に「異文化PBL」と「グローバルPBL」と呼ばれる2つのPBLについて紹介をする。「異文化PBL」の特徴は、国内の他大学の学生と共に学ぶことである。国外だけが異文化ではなく、違う伝統や環境の元で学ぶ他の大学生との出会いも異文化との出会いと捉えている。芝浦工業大学大宮キャンパスは文教大学越谷キャンパスから近いさいたま市見沼区に位置しており、今後この「異文化PBL」を利用したグローバル人材育成についての連携、協働が期待できる。

一方「グローバルPBL」では海外の大学の学生と協働することで異文化を学ぶと同時に外国語でのコミュニケーション能力を鍛えることができる。タイの大学生と取り組んだグローバルPBL科目に対する学生の満足度は高く、英語や海外への興味が増したと報告されている（橋口・永海・草野・柴崎・長谷川・井上，2013）。2016年度においては、台湾、韓国、ロシア、マレーシアの協定校の学生と取り組んだPBLの結果発表が豊洲キャンパスと芝浦キャンパスで行われた。この大学の取り組みは、今後の外国語学科がPBLを実施する上で示唆に富むものであり、将来的

には海外協定校の学生と外国語学科の学生と一緒に学べる環境づくりを目指し、参考にしたい。

同志社大学では全学共通教養教育科目としてPBLが取り入れられている。前述した大学の例と同様に、同志社大学のPBLでも地域社会や企業との連携が重視されている。「社会の教育力を大学へ」を目指し、学外からテーマや担当者を公募している。授業を履修できるのは全学部・全学年であり、1つのプロジェクトを学部・学年横断的に構成された少数のグループで担当する。2016年度のテーマとしては、例えば「テーマパークの利用者満足度向上に関する企画立案プロジェクト」、「留学生と創る『錦市場：京の食文化読本』制作プロジェクト」、「ラジオで発信：若者と高齢者の音楽イベント制作」などがあり、すべて地域の文化や社会に密着したものである。

2004年に開学した秋田国際教養大学も2014年にスーパーグローバル創成支援事業（グローバル化牽引型）に採択され、「日本発ワールドクラスリベラルアーツカレッジへの進化」を目指した取り組みを展開している。具体的には、「24時間リベラルアーツ教育の促進」「世界標準カリキュラム」「日本の英語教育を改革」「国際ベンチマーキング」の4つの取り組みを行っている。中でも本稿のテーマとの関連で着目したいのが、「世界標準カリキュラム」を推進する中で、ASEAN諸国提携校とPBLを推進している点、「日本の英語教育を改革」という取り組みの中で、日本人学生・留学生主導で、イングリッシュビレッジを開講し、地域の小中高の生徒との交流を実践している点である。

本節で取り上げたPBLの実践例では、学生たちが自らが所属する大学の枠を越え、国内外の学生や地域・社会の人々と交流し協働することにより、課題・問題解決を図り、その成果を何らかの形で発表・発信していることが確認できた。しかし、それぞれの実践において、学生がどの

程度主体的に課題・問題設定を行い、教員がどのような関わり方をするのか、大学組織が学生のPBLの学びのプロセスでどのようなサポートを行っているのかについては、さらに情報を収集し、検討する必要がある、今後の課題である。

また、九州工業大学の事例のように、一つの学科がモデルケースとして先鞭をつけたPBLへの取り組みが、学部全体に波及し、学びのあり方を変化させていくプロセスについても、さらに検証が必要であろう。外国語学科も文教大学文学部の新しい学科としてPBLをいち早く導入するという点でモデルケースとしての使命があると感じている。

4. グローバル人材の育成とPBL

本節では、各種団体や自治体などの国際交流や多文化共生に関わる取り組みを紹介し、高い言語運用能力を備え、地域に根ざしたグローバル人材育成を目標に掲げる外国語学科が、どのようにそれらの取り組みをPBLの授業として活用していけるか、その可能性を考察する。

団体や自治体が行っている取り組みは、日本人を対象にしたもの（留学支援や海外ボランティア派遣）、日本国内に住む外国人に対するサービス、観光客を対象にしたサービスに大別される。まず日本人を対象とした海外ボランティア派遣事業を行っている団体では独立行政法人であるJICA¹が知られている。JICAには青年海外協力隊とシニア海外ボランティアと呼ばれる二つの募集区分がある。学生に対しては大学を休学する必要がある長期的な派遣の他に1ヶ月から参加できる短期ボランティアの募集も年に4回おこなわれており、大学の長期休みを利用し

¹ 2003年に設立された外務省所管の独立行政法人。政府開発援助（ODA）の実施機関の一つ。前身は1974年に設立された国際協力事業団。

での参加も可能である。活動の例としては、日本語や武道などの指導、環境や公衆衛生に関する啓発のイベントの企画や実施などが挙げられている。

国際教育交換協議会（CIEE）日本代表部では多様な国際ボランティア活動を紹介しており、積極的に説明会を開催している。実際に多くの大学が学生のグローバル教育に活用しており、2016年2月現在では青山学院大学、国際基督教大学、神田外語大学、九州大学、芝浦工業大学、北海道大学など26校がメンバー校としてCIEEが主催するプログラムの企画・運営に協力しその活動を支えている。例えば芝浦工業大学では、グローバル養成ツールのひとつとしてCIEEが開催する国際ボランティア・エコボランティアのプログラムを用意している。CIEEのボランティア内容は多岐に渡っており、例えばインドネシアでの日本語クラスのサポート、オーストラリアやニュージーランドでの環境保護やチャイルドケアに関わるボランティア活動などがある。近い将来CIEEの担当者に説明会を開いてもらい、外国語学科の学生が国際ボランティアの活動に参加できる道筋を作りたいと考えている。同時に、文教大学がメンバー校として登録し、全学的な取り組みに発展させる可能性を検討したい。

次に観光客に対するサービス事業を取り上げる。2020年の東京オリンピック開催を控え、外国人観光客に対するサービスへの意識の高まりや取り組みはビジネス界のみならず自治体から個人のレベルに至るまで広がってきている。埼玉県の国際交流協会ではさまざまな活動をおこなっているが、その中の一つに外国人への案内ボランティアの養成講座がある。2日間に渡るカリキュラムでは、ボランティアについての基本的知識、スポーツの国際大会などについての知識、応急手当の実践、英語や中国語で案内ができるような内容を学べることになっている。今後もこ

のような講座が継続的に開催されるようであれば外国語学科の学生が受講し、案内ボランティアとして活動する可能性がある。

文教大学越谷キャンパスが位置する越谷市にも一般社団法人「越谷市観光協会」が中心となって、観光ボランティアガイドを「こしがやのまち案内人」の方々に委嘱する活動を行っており、将来的な連携を模索したい。

学生を対象としたグローバル人材育成への取り組みとしては、埼玉県「グローバル人材育成センター埼玉」と呼ばれる組織がある。ここでは日本人学生と外国人留学生を留学前から留学後までトータルにサポートすることを目的としている。2016年4月現在県内17の大学や専門学校が会員となっており、学生の留学支援や留学生の就業・就職支援を行っている。文教大学も会員になることで他の大学や企業と情報交換ができ、学内のグローバル化が促進されるのではないだろうか。

日本国内に住む外国人に対するサービス事業は各自治体の国際交流協会などが中心となる。ここでは特に埼玉県内の自治体、特に越谷市の例を紹介する。越谷市国際交流協会では、越谷市に在住する外国人と日本人の交流を目的として、毎月1回「おしゃべりサロン」というイベントを開催している。また、月に2回開催される「多文化こども学習塾」では日本の学校に通う外国人の子どもたちを対象に学校の勉強の補習・宿題の手伝いなどを行っている。数が限られたボランティア会員によって支えられている活動であり、今後外国語学科の学生が主体的に関わっていける取り組みである。

文教大学越谷キャンパス近隣での国際交流活動の他の可能性としては、さいたま市が事業母体となっている大宮盆栽美術館および大宮盆栽村に関連した観光イベント等へ積極的関与が考えられる。海外の盆栽愛好家の数は増加傾向にあり、2017年にさいたま市で開催される第8回世界盆

裁大会では、英語および中国語・スペイン語・韓国語の通訳ボランティアを募集している。大きなイベントはもちろんのこと、継続的な関係を構築する可能性を探りたい。

最後に、外国語学科のカリキュラムに照らし合わせて、上記のさまざまな活動に関わっていくプロセスを考えてみよう。外国語学科でPBLを展開する科目が提供されるのは、3年次春・秋学期であるが、PBL実施に向けて、低年次の科目において準備すべきこととして、大きく2つのことが挙げられる。まずは、1年次の「研究基礎演習Ⅰ・Ⅱ」、2年次の「Problem-solving Workshop」「Proseminar」などの必修科目の学びにおいて、主体的に問題発見・課題設定をし、必要な情報を協力して収集し、意見交換・合意形成をする練習を十分行う、ということである。2つめは、2年次の1 Semester 留学およびそれに先立つ1年次の「Study Abroad Preparation」を通して、異文化に対する敬意と共感を育み、さらに自らが属する地域・文化に対する理解を深めることである。1・2年次の学びの中で生まれた疑問や問題意識を3年次のPBLに繋げ、学生が主体的に地域・社会に関わりながら学んでいく環境を整えるよう準備を進める必要があるだろう。

5. おわりに

国内外の教育機関におけるPBLの急速な広がりからして、PBLは現在の社会のニーズに合った新しい学習形態であり、今後も導入する機関は増えると思われるが、実施に当たってはいくつかの課題があることが報告されている。例えば、新しい形態に教員も学生も不慣れなことからプロジェクトのスケジュールに遅延が起こったり（永田・大和 2011）、情報収集やプレゼンテーションには欠かせないネット環境に個人差があり、そこでデジタルデバイド²が起こってしまうこともある（根津・森

脇・松本、2006)。またひとつの学科の数人の教員の取り組みから、いかに学部全体、あるいは全学的な取り組みに広げていくかも大きな課題であり、その為には事務局の協力も必要となってくる（先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム拠点間教材等洗練事業PBL教材洗練WG, 2011）。

河西・丸山（2010）の実証的研究によると、学業成績、自己学習時間、満足度などの因子がPBLの効果に相互的に影響を及ぼしており、効果的なPBLを行うには、早い段階から学生に自己学習の習慣をつけさせることが肝要であるという。高校まで主に座学中心の授業を受けてきた学生が自律的な学習態度を身につけるには時間が掛ると推察されるため、入学当初から自律的な学習態度を新たに作っていくという意識が教員側にも学生側にも求められる。

またPBLをより効果的な授業にするために、教室環境の改善も提案したい。従来型の座学とは違い、PBLではグループ学習、教員とのインタラクション、プレゼンテーションを行う機会が多く、ネット環境が整っているアクティブラーニング教室の活用が重要である（天野・山本・藤森・松野, 2016）。既存のPC教室やCALL教室の環境や活用実態を検証し、今後の活用方法の工夫や環境整備を検討したい。

本報告はまだ実施していないPBL教科のための下準備として、先駆的な取り組みを行っている大学などの報告書から学び、実際に地域の自治体や施設などを訪ねたり、学会に参加して報告を聞くなどの取り組みをおこなってきた成果をまとめたものである。このような活動によって手

2 「情報格差。IT（Information Technology 情報技術）を使える人と使えない人との間に生じる格差をいう。コンピュータやインターネットなどに対する習熟度や活用度の違いによって、得られる情報の量や質に格差が生じ」ことをさす。（『ブリタニカ国際大百科事典』より引用）

探り状態ながらも外国語学科で実施するPBLのイメージを掴んだのと同時にこれから本格化する準備の大きな足がかりを築くことができた。学科開設以降も積極的に多様な機関から学び、提携先を探し、学生の豊かな学びにつながるPBL教科を作り上げていきたい。FD活動のひとつとして、今後PBLを全学的な取り組みに発展させられれば理想的である。

引用文献

- Bequette, G. (2005) Academic language and literacy socialization through project-based instruction: ESL student perspective and issues. *Journal of Asian Pacific Communication*, 15 (1), 191-206.
- Bell, S. (2010) Project-based learning for the 21st century: Skills for the future. *The Clearing House*, 83, 39-43.
- Grant, M. M. (2011) Learning, beliefs, and products: Students' perspectives with project-based learning. *Interdisciplinary Journal of Problem-Based Learning*, 5 (2), 9-27.
- Helle, L, Tynjala, P., & Olkinuora, E. (2006) Project-based learning in post-secondary education: theory, practice and rubber sling shots. *Higher Education*, 51, 287-314.
- Markham, T. (2011). Project based learning: A bridge just far Enough. *Teacher Librarian*, 39 (2), 38-42.
- 天野修一、山本好比古、藤森敦之、松野和子（2016）「プロジェクト型英語授業におけるアクティブラーニング教室の活用：実践報告と今後の課題」『静岡大学教育研究』12, 101-108.
- 河西理恵、丸山仁司（2010）「PBLの学習効果と学生因子の関係について」『第45回日本理学療法学会大会抄録集』37（2）.
- 先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム拠点間教材等洗練事業

- PBL教材洗練WG (2011) 「PBL (Project Based Learning) 型授業実施におけるノウハウ集」
- 永田佑輔、山戸昭三 (2011) 「PBLで発生した問題とその解決事例」『プロジェクトマネジメント学会研究発表大会予稿集』 504-506.
- 根津知佳子、森脇健夫、松本金矢 (2006) 「教員養成型PBL教育の課題と展望：Moodleを使っでのチューター・学生の自立的活動の支援を通して」『京都大学高等教育研究』 12, 27-39.
- 橋口茉希、永海雄太、草野修平、柴崎夏美、長谷川浩志、井上雅裕 (2013) 「グローバルPBL体験報告: 学生からの報告、そして、次回のラーニングファシリテータとしての抱負」『公益社団法人日本工学教育協会 平成25年度工学教育研究講演会講演論文集』 262-263.
- 森村久美子、鈴木真二 (2012) 「グローバルリーダーに求められる英語力養成のためのPBL提案」『工学教育』 60 (1), 112-118